

趣味を仕事にすること

——ユツケさんは出版社に勤められたあと、現在はフリーランスで編集の仕事をしているとお聞きしました。趣味と仕事の関係性はさまざまと思いますが、ユツケさんの場合その関係性はどのような形でしょうか。

会社に入って間もないときは、趣味のことは考えずに仕事を頑張ろうと思っていました。というのも、社会人が趣味のためにお金を稼ぐことは邪道っぽいと感じていました。大前提に趣味と仕事は分けて考えるべきで、仕事は趣味より優先すべきものという考えがあったんだと思います。でもいざ働いてみると、趣味と仕事の領域が重なることがあったので、完全に分けて考えることはできないと気付きました。例えば私は新卒で漫画の編集部配属されたのですが、好きなアイドルをイメージしたキャラクターを作家さんに打ち合わせで提案したり(笑)そこから「楽しいことをしてお金も稼げたらハッピー」という思考で仕事をするようになりました。そういった思考でいると、仕事の時間が趣味の時間でもあるように思えてくるんです。私と同じことを感じている人は「本業はオタクです。」(註1)で取材をした中にも何人かいました。一見、趣味と仕事を分けている人の中にも、コンサートは月一しか行けないけれど、実は仕事でもずっと推しのことを考えているというような人がいたりして。

いわゆる「オタク」のような、濃い趣味がある社会人は、どのような趣味と仕事の関係性に関わらず、趣味にもしつかり重きを置いている人は多いと感じますね。

——趣味と仕事がつちり分かれているわけではないとのことですが、一般に趣味を仕事にすると辛いと考えられていることについてはどう思われますか。

その人の性格によるんじゃないかと思います。私は今までいろいろな人の話を聞いてきて、趣味を仕事にできる人には2つのタイプがあるのではないかと感じました。一つは、趣味を仕事にすることで趣味への見方が変わってしまうことを、プラスに捉えられるタイプの人です。「本業はオタクです。」で取材したアイドル好きの芸能マネージャーさんは、まさにそのタイプでした。彼女は仕事柄、自分の推しと舞台裏ですれ違うことがあるらしいんです。推しも人間なので、舞台裏では疲れていてコンサートやテレビで見るときと印象が異なることがあるそうなんです。オタクの中にはそういった姿にショックを受けてしまう人もいると思いますが、この方はむしろ親しみを感じるとおっしゃっていました。もう一つは、趣味を仕事にすることで生まれる辛さを、楽しさが上回るタイプの人です。例えば、趣味で漫画を描いてそのまま漫画家になった人にも、漫画を描くことを職業にしたゆえに生まれる辛さはあると思います。でもそれ以上に、自分の作

品をより多くの人に読んでもらえるといったことを楽しめたら、仕事を続けることができると思うんです。

——ユツケさんはどちらのタイプなのでしょうか。

私は後者ですね。実際、編集の仕事は拘束時間も長いし、体調を崩したりして大変なこともあったのですが、自分が手がけたものが世の中に出て読者が喜んでくれる姿を見るのは楽しいです。私は趣味を仕事にしてもそれを楽しめるタイプの人間ですが、実は私のようなタイプは少数派です。「本業はオタクです。」出版の際に読者にアンケートを取ったところ、趣味を仕事にしている人は全体の1.5割くらいでした。残りの人は趣味とはまったく関係のない仕事をしているようだったので、タイプはさまざまだと分かりました。

両立のために

——ユツケさんは学生時代、仕事を始めると趣味の時間が奪われてしまうのではないかとというような、趣味と仕事の関係性に対する不安は感じていましたか。

感じていました。「本業はオタクです。」のはじめにも書いたのですが、許されるなら就活の面接で「御社では趣味と仕事の両立はどのくらい可能ですか」と聞きたかったです。週末は絶対にコンサートに行きたい